

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370589

研究課題名(和文) 日本語教育学研究の体系化および方法論の確立

研究課題名(英文) Establishment of JSL/JFL research: the discipline and methodology

研究代表者

義永 美央子(YOSHINAGA, Mioko)

大阪大学・国際教育交流センター・准教授

研究者番号：80324838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は新しい学問分野として確立されるべき日本語教育学を体系化し、日本語教育学研究のあるべき方法論を実現することを目的として、日本語教育に関連する先行研究のテーマと研究方法を整理・分析した。その結果、これまでの研究では「日本語」「学習者」「教育・社会」が主なテーマとされ、それぞれのテーマに応じて特定のデータと方法論が採用されていることが明らかになった。今後、日本語教育学が自律した体系をもつ学問分野となるためには、上記3テーマの研究を有機的に結びつけ、さまざまな専門性をもつ人々が協働・連携していくことが求められる。

研究成果の概要(英文)：This research considers Japanese as a Second or Foreign Language (JSL/JFL) as a new academic discipline, and aims to systemize it as well as to realize research methodologies in this particular field. For this purpose, we rearranged and analyzed themes and research methods from previous studies related to Japanese language education. We found that the major themes discussed by previous studies were “Japanese language,” “learners,” and “education/society,” and that specific data and methodologies were utilized for each theme. In order for Japanese language education to establish itself as a discipline with its own independent system, research pertaining to the three above-mentioned themes must be organically tied together. Moreover, there is a need for cooperation and coordination among various specialists.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育学 体系化 研究テーマ 研究の方法論 日本語 学習者 社会 教育

1. 研究開始当初の背景

かつて「日本語教育」研究が、伝統的な「国語学(日本語学)」とアメリカの「応用言語学(言語教育)」の影響のもと、学際的研究として誕生したことに比べ、現在の「日本語教育研究」は、その領域を広げ、取り扱う項目も飛躍的に増加した。たとえば、言語習得に関する心理学的アプローチや「生活者としての外国人」の急増による日本社会の変容、それにとまなう地域コミュニティへの支援など、かつては取り上げられなかったテーマが、新しい、そして重要な日本語教育研究の分野であると考えられるようになった。すなわち「日本語教育研究」という学際的分野が、自律性の強い「日本語教育学」へと変貌しつつあることは明らかである。

これを受けて、2007年に学会誌『日本語教育』(137号)が「『日本語教育学』とは何か」という特集を組んでいる。しかし、この特集は隣接する各分野の専門家が、学際的見地から日本語教育を論じたものであり、自律的な日本語教育学の全体像を提示するにはいたらなかったように思われる。

一方、2000年以降、大学院の拡充とともに、日本語教育を専攻する若い研究者が急速に増加した。若い研究者は、どのような学問領域においても先行研究の「模倣」から自分自身の研究テーマと手法を見つけていくものだが、新しい分野である日本語教育研究は、伝統的学問領域とは異なり、先行研究の模倣から自らの立ち位置を見いだすことが難しい。本研究グループはいずれも最初から「日本語教育」を専攻してきた若い研究者であるが、現在、指導している大学院生のためにも、自分自身の研究のためにも、自分たちの研究領域を鳥瞰的に眺めることが必要であると感じていた。

そこで、平成23年から共同で『日本語教育』の100号以降に投稿された研究論文を分析する作業をかさね、その内容が、大きく(1)言語に関する研究(2)学習者に関する研究(3)教育・社会に関する研究、に分類されることと、その間の関係性の濃淡を明らかにし、日本語教育学会・平成24年度春季大会においてパネル発表をおこなった。本研究はこのときの研究成果をさらに発展させ、さらに資料分析の範囲を広げて「日本語教育研究」の現在の全体像を体系化し、そこから将来「日本語教育学」があるべき姿、そしてそれを達成するための方法論を考察し、確立しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は新しい学問分野として確立されるべき日本語教育学を体系化し、日本語教育学研究のあるべき方法論を実現することを目的とする。具体的には、1)1945年以降の日本語教育およびその研究の推移を通時的にまとめる、2)従来の研究が取り扱ってきた分野とトピック、データと研究の方法論を、

過去に発表された研究論文より統計的に分析し、日本語教育学研究の現状を明らかにする、3)多領域の専門家との議論を通じて日本語教育学研究の「あるべき方法論」を考察し、その実現の方法を探る、4)以上の3点をうけて「日本語教育学」の設計図を展望する、の4点を目指す。これまで抽象的に論じられてきた「日本語教育学」の姿を現在までに発表されてきた研究論文の分析から具体的・明示的に明らかにしようとするところに本研究の学術的価値と独創性がある。また本研究の成果を通じて、「日本語教育学」の研究者が自分の研究の立ち位置と方向性を確認できるようになることが期待される。

3. 研究の方法

本研究は日本語教育に携わる言語・教育・社会の各分野の専門家が協働しながら、日本語教育学の体系化と研究方法論の確立を目指すものである。具体的には、先行研究のデータベース化を通じて日本語教育学の通時的変遷を明らかにし、体系化を図る。さらに、従来の研究で行われてきた手法を整理し、日本語教育学として共通化が可能な側面と、目的や研究対象によって方法が異なる側面を考慮しながら、方法論の検討を進める。

4. 研究成果

本研究の成果として、『日本語教育学の歩き方-初学者のための研究ガイド』(本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子著、大阪大学出版会、2014年)を出版した。この本では、日本語教育学会の学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文236本を分析し、扱われた分野を「言語」「学習者」「教育・社会」に大別した上で、研究テーマによって用いられるデータに一定の傾向があることを明らかにした。また、テーマの設定から先行研究の検討、研究計画および実際の調査の実施、分析とその結果の記述に至る一連の研究プロセスを整理した。さらに、コーパスや量的データの統計処理、エスノグラフィや談話分析といった質的研究など、近年の日本語教育学でしばしば採用される研究方法の基本的概念や分析の枠組みを紹介した。この本は特に大学院生等、日本語教育学を志す研究初心者およびその指導にあたる大学教員等から好評を博し、出版後すぐに2刷が行われたほか、『第二言語としての日本語の習得研究』第17号に書評が掲載されている。

このほか、生活者のための日本語教育、日本語教育学における談話分析研究、日本語教育におけるアセスメント等、研究代表者・研究分担者それぞれの専門分野に関する先行研究を整理・分析し、各分野の現状や今後の課題について検討した。また、日本語教育における教材やシラバスについても具体的なデータに基づき検討した。これらの成果を招待講演(海外含む)5件、学会発表8件、研究論文2本、著書4冊として公表し、研究

成果の学術的・社会的な公開・普及に努めている。

さらに、科研の最終年度にあたる 2016 年には、研究成果公開用のウェブサイトを開発・公開した。このウェブサイトでは、2014 年度末に本科研の研究成果として出版した『日本語教育学の歩き方-初学者のための研究ガイド』の内容の紹介とあわせて、研究の計画・実施に役立つテンプレートの無料配布、日本語教育学関連サイトへのリンク集等、特に日本語教育学を志す初学者に役立つコンテンツを多く配信している。また、研究相性診断というシステムを開発し、関心をもつ分野に関する質問に回答すると関連する参考文献が表示され、日本語教育学に漠然と興味がある人が自分にふさわしい研究ジャンルを探ることができるようにするなど、研究初学者にとってもわかりやすく本科研の研究成果を提示できるように工夫している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

義永美央子、第二言語教育における言語運用能力の評価の変遷、第二言語としての日本語の習得研究、査読有、18 巻、2015、pp.11-31

渡部倫子、徐芳芳、山下順子、横山千聖、老平実加、日本語多読アセスメントの課題と展望、第二言語としての日本語の習得研究、査読有、18 巻、2015、pp.32-52

〔学会発表〕(計 13 件)

岩田一成、義永美央子、本田弘之、渡部倫子、論文執筆における失敗例の類型論-効果的な論文作成指導に向けて-、社会言語科学会第 32 回大会、於信州大学、2013
義永美央子、日本人・日本語母語話者による日本語の学び直し-日本社会における複言語・複文化主義の可能性-、日本語教育学会 2013 年度秋季大会、於関西外国語大学、2013

義永美央子、第二言語習得研究の方法論-質的研究入門-、「言語と人間」研究会 (HLC) 第 39 回春期セミナー(招待講演) 於立教大学、2014

義永美央子、岩田一成、本田弘之、日本語教育学の体系化に向けて-生活者としての日本語学習への 3 つのアプローチによる検討-、シドニー日本語教育国際研究大会 (Sydney-ICJLE) 於シドニー工科大学、2014

渡部倫子、徐芳芳、山下順子、横山千聖、老平実加、多読アセスメント研究の動向と展望、シドニー日本語教育国際研究大会 (Sydney-ICJLE) 於シドニー工科大学、2014

渡部倫子、教師からみた文法シラバス、

ひろしま日本語教育研究会、於ザ広島タワー集会室、2014

渡部倫子、外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA、日本語指導理解学習会講話、於基町小学校、2014

渡部倫子、日本語評価のこれから、第 2 回別府大学日本語教育講演会(招待講演) 於別府大学、2015

渡部倫子、日本語多読のアセスメント、the Third Extensive Reading World Congress、於 Dubai Men's College、2015

渡部倫子、Assessing Extensive Reading in Japanese: Current Issues and Future Directions, Simposio Internacional sobre Ensino-aprendizagem de Lingua Japonesa como Lingua de Heranca, Identidade e Bilinguismo (招待講演) 於サンパウロ大学、2015

岩田一成、外国人児童の作文に見られる話し言葉、日本語教育学会 2015 年度秋季大会、於沖縄国際大学、2015

岩田一成、初級シラバス・教材・教授法の未来-文法から語彙へ-、日本語教育学会 2015 年度中国地区研究集会(招待講演) 於広島女学院大学、2015

義永美央子、日本語教師の「つなぐ」役割-複数の文脈を横断する学習者の支援を考える-、アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 (AJG) 第 38 回研究会(招待講演) 於東京海洋大学、2016

〔図書〕(計 4 件)

本田弘之、岩田一成、義永美央子、渡部倫子、大阪大学出版会、日本語教育学の歩き方-初学者のための研究ガイド-、2014、294

義永美央子、山下仁(編著) 三元社、ことばの「やさしさ」とは何か-批判的社会言語学からのアプローチ-、2015、285

三牧陽子、村岡貴子、義永美央子、西口光一、大谷晋也(編著) くろしお出版、インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践、2016、320

吉岡英幸・本田弘之(編著) くろしお出版、日本語教材研究の視点、印刷中、240

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://nkg-arukikata.jpn.org>

6．研究組織

(1)研究代表者

義永 美央子 (YOSHINAGA, Mioko)
大阪大学・国際教育交流センター・准教授
研究者番号：8 0 3 2 4 8 3 8

(2)研究分担者

渡部 倫子 (WATANABE, Tomoko)
広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授
研究者番号：3 0 3 7 9 8 7 0

本田 弘之 (HONDA, Hiroyuki)
北陸先端科学技術大学院大学・先端領域基礎教育院・教授

研究者番号：7 0 2 8 6 4 3 3

岩田 一成 (IWATA, Kazunari)
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：7 0 5 0 9 0 6 7

(3)連携研究者